

いつしか西洋美術史から遠く離れて——受賞にまつわる家系図的自由連想の断片

稲賀繁美

ふと気がつくと、1997年に「倫雅美術奨励賞」を頂戴して、はや10年が経つ。富山秀男先生からお電話を頂戴した朝を思い出す。授賞式に珍しく杖をつけて現れ、パイプを吹かして式典に立ち会ってくれた国文学者の父も、2001年に没した。「和辻哲郎文化賞」受賞を病床に伝えたのが、生前最後の親孝行となった。昨年から今春にかけ、単行本未収録論文を中心に『稲賀敬二コレクション』（全6巻、妹尾好信編、笠間書院）の刊行が成り、責務を果たせて安堵した。

先祖供養もこれで一段落、と思っていたら、米国の友人、ジュディス・ラビノヴィッチ夫妻より、曾祖父・恵四郎の白筆漢詩遺稿一冊を、全文英訳したとの報。詳細な序文には、祖父執筆になる「我が家の沿革史」（昭和18年稿）への考証も含まれる。田舎教師一族の「詩草・族譜」によもや英語刊行の日が来ようとは、泉下のご先祖様も意想外の椿事だろう。ご夫妻と5月中旬に故郷、鳥取県は境港に墓参して驚いた。恵四郎死後に末広町の土地家屋を譲った相手方の、生田屋割烹店とは、現在の水木しげる記念館にはかならなかった。ある夏、祖母の東雲町の家に、ご近所の武良夫妻がふと寄られ「うちの次

男坊も、最近有名になって」と、漫画数冊を置いてゆかれた。そんな幼少時の夏休みの午後が、ふと蘇ってきた。

南畝・恵四郎は、1901年に36歳で肺結核のため死去した。直前に松江病院に短期入院したが、ラフカディオ・ハーンの松江時代の盟友だった西田千太郎が同じ松江病院で、肺結核ゆえ同じ36歳で逝去したのは、4年前の1897年。境小学校校長だった曾祖父と、松江中学校校長の西田とは、マルティニックでのハーンとゴーガンのようにすれ違っていた。小泉八雲が急に身近な存在となった。

忘れよと云ふ人のあり 死にし子を 忘れて何を思へと云ふらん

1928年、長男・晋一を旅順で6歳にして亡くした折に、祖父・襄の詠んだ歌である。その祖父は、関東省・大連から北京、奉天と教職を歴任し、1944年末、間島省は龍井女子国民高等学校初代校長退任の朝、急逝した。祖父の故地を訪れ、その和歌を纏め直す時間が、残された私の人生に許されるのだろうか。

倫雅美術奨励賞の20年

発行日

2008年12月10日

編集・発行

公益信託倫雅美術奨励基金